

学戦都市アスタリスク ～冥王の帰還～

ゴリー少将

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

復活した冥王サウロン。悪の権化が行くその先にあるものは・・・

目次

プロローグ

1

冥王、学戦都市へ

4

プロローグ

かつての神代が終わって数千年。世界は統合企業財体と呼ばれる財閥が台頭し星脈世代と呼ばれる新人類が諸事情によって生まれ世界は回っていた。しかし、とある統合企業財体で働く予言者の魔女がこんな予言をした。

「かつて滅ぼされた冥王サウロンが復活する。かの冥王は自ら定めた理に従い、8つの心を持たぬ世界的大金持ち共を、人間の形をした機械は世界には数は要らぬとして討伐するだろう。8つの大金持ちの内2つは見せしめに滅ぼされ、生き残った6つは冥王にひれ伏し、配下として従う他なくなるだろう。滅びの山が主を迎えるべく火を噴く時こそ討伐が始まる合図である。」

これを聞いた某統合企業財体最高幹部達は他の統合企業財体と連携し、ロシアのゴルゴロス高原に軍を配置し、滅びの山が噴火する時を待った。噴火した途端に飽和砲撃・爆撃でブラッド・ドゥーアのサウロンの城を破壊する手筈だ。冥王の死後世界遺産になっていたブラッド・ドゥーアだったが、統合企業財体からすれば知ったことではない。サウロンを倒さねば自分たちが倒されるからだ。

そして滅びの山が火を噴いた。繰り返される攻撃。しかし、城には一切のダメージを与えられていない。攻撃の煙が晴れると、そこには禍禍しい黒鎧を着た者がいた。

「我が名はサウロン。貴様ら心なき金持ちを討伐しに甦った者。悪そのものたる私の願いを妨げる者を討伐しに来た。かかってくるが良い金持ちの犬共。冥王の戦い方を教えてやろう。」

そう言われて突撃する統合企業財体の精鋭兵たち。だがいくら星脈世代でも神代の冥王には敵わない。10分足らずの時間で全ての統合企業財体の軍は壊滅し、2つの統合企業財体はその日の内に滅びた。残る6つの統合企業財体は彼に和平交渉を持ち掛けた。すると、

「我は貴様らに力を示した。貴様らを隸とする為だ。和平も何もあるまい。貴様らが我に無条件で従うのだ。それとも貴様ら全員今すぐ滅ぼしてくれようか？」

「「服従しますから滅ぼさないで!!」」
となった。

冥王はEⅡP、W&W、銀河、フラウエンロップ、ソルネージュ、界龍の6つの生き残った統合企業財体に対し指輪を与えた。無論サウロンの「一つの指輪」の支配下であり、服従の呪いがかけられた代物である。最後に冥王は

「貴様らは我から別命あるまで今まで通りにしているが良い。我は弟子を探す。神代に

比べれば今の人間は弱すぎるが、鍛えれば光る石があるようだからな。後金儲けばかりしてないで慈善事業に少し手を貸してやるが良い。それで救われた者の中に貴様らに利をもたらず者がおろう。最後に一つ命ずる。私の存在を世間に広めないように手を尽くせ。我にはかつてのように世界を支配するだけの覇気がないからな。放浪の旅に出る。無名の方が何かとやり易い。」

そう言つてサウロンは灰となつて消え去り、呆然とする各統合企業財体最高幹部達が残るのみであつたという

冥王、学戦都市へ

我が復活して早100年。我が名は我が隷共が徹底して隠蔽した為、私の復活は世間一般には知られずに済んだ。そして我は復活してから、我が力に以前と変わりないか確認したが衰えてはおらずむしろ強くなっている。総合的に力が強くなり、我が弟子に相應しい者を探す為各地にちらばっておる我が最も忠勇なる部下（ナズグル）達や霊共等をを任意に我が下へ物理的に呼び出す召喚能力に覚醒めたようだ。そう役に立つとは思えん能力に覚醒めたが、もし雑魚が我に攻撃してきたらあやつらに丸投げするのもありだと思っておる。弟子も何人か育て、我を驚かせた者がおったが、我を倒した者はおらん。逆にいたら怖いがな。また一人日本とかいう国で弟子を育て終わり、旅に出たおったが、最強の弟子から連絡が入ったので対応しておるところだ。

「お久しぶりです我が師よ。」

「ヘルガ、我に何用か？」

「学園都市六花で私が何をしているかは覚えてらっしゃいますか？」

「その警察組織の長であったな。それがどうかしたか？」

「実は今度隊長就任40周年記念パーティーがありますので御報告とパーティーへあなたを招待させていただこうと思ひまして。」

「ほう。此事で我に連絡してきたなら即座にその首はねるところだが、祝い事なら別だ。良からう。そのパーティーに出てやろう。あとヘルガ、金を持つてくるでないぞ。我が奢つてやろう。」

「ですが『我に二度同じことを言わせるでない』・・・はっ。」

「だがただそなたを祝うだけではそなたも面白くあるまい。サプライズを用意しておくから楽しみに待つておるが良い。」

「はっ。ありがとうございます。お待ちしております。それでは。」　　ピッ

「オットー・ボス君。星導館学園への特待生編入おめでとうございます。私はあなたを

心から歓迎し、星導館学園を代表して成果を期待します。どうぞよろしく願いますね。」

我が思い付いたサプライズ・・・それは銀河の手引きで六花に学生として入り、いつもとは違う姿でヘルガを驚かせるというものだった。名前はオットー・ボスで通してある（姿は碧眼のFateの子ギル）。銀河め・・・星武祭のポイント底上げをしてやると言った途端私の要求を素直に受け入れよって。現金な奴等よ。ちなみにこの事は銀河以外の隸共には言っていない。面倒くさいからな。戸籍はドイツ政府を脅して手に入れた。

「こちらこそよろしくお願い致しますクローディア・エンフィールド生徒会長。」

「まずは校舎をご案内してから各種書類をお渡しして今日は終わりですが、明日から授業に出ていますのでよろしく願いますね。今日はもう一人特待生の方がいらっしやいますので少々お待ちになって下さい。あと私のことはクローディアで結構ですよ?」

ドガーン

「生徒会長、今爆発音と炎が一瞬見えましたが、こんな朝から決闘ってあるんですか?」

「いえ。普通はありませんが……炎がでておなつ女子寮から音がしたということはユリスでしょうか……ボス君、お願いがあります。」

「なんででしょう?」

「私は確かにあなたを特待生として我が星導館学園に招待致しました。しかし、銀河から言われて招待したに過ぎず、私はあなたの情報を全く存じ上げておりません。ただ母から『星導館学園の星武祭ポイントに優勝ポイントを間違いなく加算してくれるから招待しろ』と言われただけなのです。』

「要は私の実力を知りたいと生徒会長は思っているのですね?だから今女子寮で起きてる戦闘を止めろと?」

「はい。お願いできますか?今戦闘をしている片方は私の友人で我が星導館学園の序列5位です。ですが、母の言う通りならあなたはユリスを止められるはずですから。」

「……わかりました。特待生として招待していただいた以上、あなたには恩義があります。今回は恩を返す良い機会でしょう。止めて参ります。」

「ありがとうございますボス君。ではいつてらつしやいませ。」 窓から投げ出される。

「いきなり我を投げ出すとは……あの腹黒生徒会長はよほど我を怒らせたらしいな。しかし、あのピンク髪の方が腹黒の友人といったところか……相手は……待て!何

故あやつがあそこにおるのだ？連絡など入っておらんぞ!!まさかもう一人の特待生とやらとはまさか……。」

バゴーン

「ほう……今のをかわすか？中々良い目を持っているようだな覗き魔？」

「覗き魔って……事実だけどハンカチを届けようとしただけだから許して欲しいんだけど……あとこの目は師匠からの贈り物だよ。良い鍛え方をしてくれたから。」

「ほう……ならば是非貴様の師匠と戦ってみたいものだ。貴様がそれほどなのだ、さぞ強かろう。」

「それはやめた方が良いよ？死ぬよ冗談抜きで。俺も事実何回か死んでるから。」

「……私の悪口とは……随分偉くなったものよな綾斗よ？」

「ん？って先生!?!なんで六花に？というよりなんですかその姿？また変えたんですか？」

「我は冥王だぞ？その程度できずしてどうする？まあそれより……我が弟子が迷惑をか

けたようだ。師としてお詫びしましょう王女よ。」

「貴様は？」

「私はオットー・ボス。彼の師であり、特待生として星導館学園へ今日から入ることに相成りました。以後お見知り置きを。」

「相変わらず猫被るのが上手ですな先生？」

「お主は黙つとれい。」

「事情は把握しているなボス？ 貴様の弟子が、私の思い出の品を私に届ける為とはいえ部屋に侵入し、あまつさえ下着姿を覗いたとあつては懲罰せずにはいられないのだからか？」

「私としてはまあできれば純粹培養された心を持つこやつを許してやつて欲しいのですが。」

「……。」

「そう睨まないでいただきたい。綾斗よ彼女に決闘を申込み。さすればお主は力を世界に示せるし、王女殿はお主をローストチキンにできる。互いに損のない方法はこれしかあるまい。生徒会長にはこの喧嘩を止めるよう言われたが、決闘を止めろとは言われておらんからな。この煌式武装を使い綾斗。我が与えた剣は使うなよ？ 強すぎる。」

「わかりました。」

ブント

「覚悟は良いな？」

「・・・今思ったんですけどなんで俺がローストチキンになるのは確定なんですか先生？。」

「アーアーキコエナイ。」

「無視ですか・・・。」

T o B e C o n t i n u e d